

## ルカによる福音書16章「富の管理者」

### 1A 主人への積極応答 1-13

1B 将来に迎えられる家 1-8

2B 小さな事への忠実さ 9-13

### 2A 斜め見る宗教者 14-31

1B 隠し持っていた金銭愛 14-18

2B 金銭愛の行く末 19-31

1C 無慈悲な心 19-22

2C 苦しみの場所 23-31

## 本文

ルカによる福音書 16 章を開いてください。16 章は 15 章の続きです。イエス様が取税人や罪人がやって来て、イエス様の言われることを聞いているので、それで食事をしました。それをパリサイ派の人たちと律法学者が不平を鳴らしました。それでイエス様が三つの喩えを話します。一匹の迷い出た羊を捜す羊飼、銀貨をなくしたのを捜す女、そして、放蕩息子の話です。そこでイエス様が最も言われたかったのは、兄息子が父の示した弟息子への恵みに、怒ったことです。それが彼らの姿でした。恵みと慈愛に満ちた父の姿が疎ましく思えたのですが、取税人や罪人と食事をしているイエス様の姿と怒っているのと同じです。

そしてイエス様は、弟子たちにお語りになられます。弟子たちに語られる時に数多く出て来る喩えは、「管理する僕」であります。イエス様が「12:42-43 では、主人によって、その家の召使いたちの上に任命され、食事時には彼らに決められた分を与える、忠実で賢い管理人とは、いったいどれでしょうか。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。」と言われましたね。それと同じように、イエス様は管理人の喩えを使われます。午前礼拝でお話しました、そこに出て来る主人の姿は、ある意味で放蕩息子の父とつながっています。心の広い主人だからこそ起こった、あまりにも極端な話であります。その神に自分は仕えていて、その恵み深さを信用して、行動に移しなさいという使信になっています。

### 1A 主人への積極応答 1-13

1B 将来に迎えられる家 1-8

1 イエスは弟子たちに対しても、次のように語られた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この管理人が主人の財産を無駄遣いしている、という訴えが主人にあった。2 主人は彼を呼んで言った。『おまえについて聞いたこの話は何なのか。会計の報告を出しなさい。もうおまえに、管理を任せておくわけにはいかない。』」

主人のところに、どこからでしょうか内通者がいました。ここで主人が寛大なのは、彼だけ呼び寄せ、内密にこのことを済ませようとしています。解雇するのですが、会計の台帳を出しなさいとだけいっているのです。これはちょうど、ヨセフがマリアの妊娠を知って、内密に離縁させようとした判断と似ています。本来、姦淫をした女は石打ちで殺さないといけません。けれども、離縁で終わらせ、しかも内密にして動いたのです。これが、この話のニュアンスです。

3 管理人は心の中で考えた。『どうしよう。主人は私から管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力はないし、物乞いをするのは恥ずかしい。4 分かった、こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、人々が私を家に迎えてくれるようにすればよいのだ。』

管理がこれまで仕事だったのですから、肉体労働はできないし、物乞いは当時、体の不自由な人がよくしていました。エルサレムの神殿の美し門で、物乞いをしていた足のなえた男のことを思い出してください、またエリコにいたバルティマイもそうでしたね。ユダヤ教では、そういった人々に施しをなさいという律法を持っていたので、その慈善に抛り頼んでいたのです。けれども、健全な体をしていて、そんなことはできないという恥ずかしさです。

そして、ここで「分かった、こうしよう。」というのが大事です。ここが放蕩息子の話と似ていると言った所以です。「15:17 しかし、彼は我に返って言った。」とあります。放蕩息子は今の現状をよく考え、それから父の慈悲深さを信頼して、本来なら懲らしめられ、石打ちにされても良かったような罪を犯していたのに、それでも雇い人の一人にしてくださるかもしれないと期待して、それで行動に移しました。ここでは、管理の仕事を辞めさせられた後も、この主人が寛大な人だということを前提にして、解雇された後の就職口を考えたのです。

5 そこで彼は、主人の債務者たちを一人ひとり呼んで、最初の人に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言った。6 その人は『油百バテ』と答えた。すると彼は、『あなたの証文を受け取り、座ってすぐに五十と書きなさい』と言った。7 それから別のの人に、『あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、その人は『小麦百コル』と答えた。彼は、『あなたの証文を受け取り、八十と書きなさい』と言った。

「バテ」とは娘という意味ですが、娘一人が運べる水の量を表し、一バテは約 40 リットルを示します。したがって、100 バテは 4000 リットルで、油に換算すると 1000 デナリに相当するので、約 500 万円ぐらい免除したことになります。一コルは 400 リットルで、免除額を計算するとやはり約 500 万円ぐらいです。相当の金額ですね。しかもそれぞれの証文を彼ら自身に書かせています。彼らは当然、この免除が管理人の勝手にやっていることではなく、主人の意向だと思っています。ここが味噌で、それで 8 節につながります。

8 主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた。この世の子らは、自分と同じ時代の人々の

扱いについては、光の子らよりも賢いのである。

なんと主人は褒めているのです。とんでもない不正であり主人に対する詐欺なのですが、彼が褒めたのは不正のことではなく、賢さ、抜け目なさです。今で言うと、Win Win の関係です。負債を免除してもらった人々はもちろん喜んでいますが、その主人のことも喜んでいますが、当時の社会では、面子がとても大事にされます。搾取は当たり前の世界です。その中で主人が慈悲深いことをしたということで、評判は良くなります。ですから、ここで不正の管理人がいたのだなどと言っても、信じてもらえないどころか、一気に面子を自ら崩してしまうことでしょう。それでもって、この管理人はこれら免除した人々を味方につけたので、彼らは彼を自分のところに雇用するかもしれません。

イエス様は、ここで弟子たちに戒めを与えておられます。それはまた、私たちに對する戒めでもあります。私たちは、「世」であれば何でもかんでも見下す傾向にあります。それは神の国、光の国とはかわりがないとします。しかし、弟子たちは世の光としての召しを受けています。世に属していませんが、世の中に生きているのです。ですから、自分と同じ時代に生きている人々について、どう扱うかについて賢くなければいけません。けれども、世の子らのほうが、光の子らよりも賢いのだと言われています。

ある時に、インターネットのテレビ番組に、教会の若い牧師さんが、著名な人のところに相談しにいった、「コンサル」といって、なぜ教会に人々が来ないのだろうかということを相談しにいきました。普通、人々が牧師のところに相談しに行くのに、キリスト者でもない人のところに相談しに来たのです。私は、その時にそこで受けるアドバイスそのものに注目しませんでした。そうではなく、彼らが即座に、何が問題であるかを見分ける能力、教会であれば何を願っているのか、何を求めているのかを察知して、的確に応えようとする能力、これがすごいと思いました。キリスト教に対して偏見を持たずに、相手の立場に立って話すということです。

もしここで、私たちが、「どうせ世の中の話でしょ？その人に伝道しなければならないのに、どうしてそんなアドバイスをもらったりするの？」としたら、イエス様のここでの言葉を台無しにします。私たちがどれだけ、教会に一度も来たことのない人に、その人たちの立場に立ってそこから伝道をしてきたでしょうか？イエス様は、サマリアの女に対して、そこにある井戸の水から永遠の命をお語りになりました。ユダヤ人指導者のニコデモに対しては、聖書の中から御霊によって新しく生まれなければいけないことを語られました。パウロは、ユダヤ人にはユダヤ人のようになり、ギリシア人にはギリシア人のようになった、全ての人の僕になった、それは、「何とかして、何人かでも救うためです。( I コリ 9:22) 」とからです。

私たちは、教会において神が聖い御声をかけてくださるということだけでなく、神から遠く離れたような世において、社会の中でも語りかけておられるということを知らないといけません。聖書は、教会に対して語られている言葉だけではなく、世界に対して神が語っている言葉です。

## 2B 小さな事への忠実さ 9-13

9 わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。

午前礼拝で詳しくお話ししました。不正の富とは、ここの不正の管理人がお金を動かしていたように、お金というのはと不正に使われることがあります。けれども、そこで蔑ろにするのではなく、そういったことにも忠実でいて、「自分のために友をつくりなさい」と言っているのです。ここで言っている「友を作る」というのは、永遠の住まいに迎え入れてくれるような友です。つまり、人々が永遠の住まい、神の国に導き入れるような事柄に持って行きなさいということです。世にあるものについて、積極果敢に御国のことを思って取り組んでいきなさい、ということです。

10 最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり、最も小さなことに不忠実な人は、大きなことにも不忠実です。11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょうか。12 また、他人のものに忠実でなければ、だれがあなたがたに、あなたがた自身のものを持たせるでしょうか。

イエス様は、富というようなものは、「最も小さなこと」として語っておられます。そのような小さなものと見えるようなものでも、主にお仕えしているのだからという理由だけで忠実であれば、大きなことも任されます。これは私たちが主に仕えることにおける大きな原則です。あまりもの多くの人々が、大きなことを語りたがります。けれども、どれだけのことを本人がしてきたのか？と言いますと、むしろ、していないから大きなことを語り、大きなことをしたがります。そして、「不正の富」とありますが、もしそういった目に見える金銭のようなものであっても、それをきちんと主にあって取り扱っていかなければ、霊的なことをどうやって任されるのか？ということなのです。そして、「他人のものに忠実」とありますが、自分とは必ずしも関係ないような事柄です。自分の心の中で、「これは自分には関係のないことだから」として、壁を作ってそこには入らないようにしているのであれば、では、自分自身の領域っていったい何なの？ということになります。

13 どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。」

ここのイエス様の言葉は大事です。富について、お金について積極的に取り組むことを怠っていると、自分は金銭には無欲と思っていても、実は金銭に囚われていくようになるのだ、ということなのです。お金というものがどのように流れるのか、どのように使われていくのかを考えていなければ、それを主のためにどう生かすかと言うことも分からないし、どう生かせばよいのか分からなければ、結局のところ富が自分を支配することがあっても、自分が富を支配することはないということです。管理をしないということは、支配されていることです。

午前中にもお話ししましたが、貧乏というのは、必ずしも金銭に無欲だからそうになっているとは言えず、むしろ心はいかにお金を持つか考えたり、またはすべてを損得勘定で考えてみたり、心は金銭に貪欲であることも多いのです。例えをどうすればよいか考えていますと、街中に犬がたくさん徘徊しているとします。その事実はいつも変わりません。犬なんか興味がない、としても、その犬は野良犬になり、狂犬病などに罹り、私たちが襲って来るかもしれません。しかし、犬には必ずしも関心がなくとも、犬を自分たちの家で育て、愛情をもって育てたら、自分たちに恩恵をもたらす愛玩動物にもなるのです。忠犬ハチ公ではないですが、何か人間にとって必要な仕事をしてくれるかもしれません。お金も似ています。お金は、私たちが経済活動をしている限り、互いの信用をはかる物差しとして存在し続けます。経済活動から無縁の人は一人もいないのです。それを無視しつづけるのならば、お金が自分の心を蝕むかもしれません。しかし、お金をどのように主にあって使っていくのかを考えて行けば、それは私たちの霊的な幸いをもたらす道具ともなるのです。

## **2A 斜め見る宗教者 14-31**

### **1B 隠し持っていた金銭愛 14-18**

14 金銭を好むパリサイ人たちは、これらすべてを聞いて、イエスをあざ笑っていた。15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとするが、神はあなたがたの心をご存じです。人々の間で尊ばれるものは、神の前では忌み嫌われるものなのです。

今、イエス様は弟子たちにお語りになっていましたが、先ほどまでパリサイ派と律法学者に対してお語りになっていたのですから、そこにパリサイ派の人たちも弟子たちに対する言葉を聞いていたのです。それで、「あざ笑って」いました。ここが問題です、「金銭を好むパリサイ人」とあります。私はこれまで、パリサイ人は非常に裕福な人だと思っていました。けれども実は、違うのです。ここもパリサイ人が実は私たちととても似ていることに気づくことになります。いわゆる裕福な宗教者はサドカイ人でした。彼らは祭司長たちであり、神殿のそば上町に住み、それはそれは豪華な家に住んでいました。

しかしパリサイ人は、裕福というほどではなかったのです。パウロが天幕作りで生計を立てていましたが、実はそれほどパリサイ派にとっては珍しいことではありませんでした。パリサイ派の教師は、自分の教えていることに対して報酬を求めなかったのです。生活は自分で働いて稼ぎ、教師として何かを教えたら、それに対価を付けることはありませんでした。けれども、今でも何か講演をしたら、その専門家はいくらいくら講演料をもらいますね。そのような発想は、当時はギリシア人が持っていました。哲学者はそのようなことをしていました。パリサイ派の人たちはユダヤ人がギリシア化されているのを憂いましたが、けれども実は自分自身もその欲に打ち勝っているわけではなかったのです。つまり、何かにつけ損得で物事を考えてしまい、霊的なことは霊的なこととして純粹に考えず、自分に得になるかどうか計算をしながら、それでいて私は、霊的なことに物質的報酬を求めないという立場だけは人々に見せています。イエス様は、このパリサイ人に潜む金銭欲に触れたのです。ですから、「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとするが、神はあなたがたの



心をご存じです。」と言われました。

このパリサイ人は、弟子たちにイエス様が熱心に、お金について教えておられました。けれども滑稽に見えたことでしょう、彼らにはお金はそれほどありません。宮の納入金について、ペテロがイエス様のところに行って、それでイエス様がペテロとご自身の分を、釣りをしなさいと命じられたのを思い出してください。ですから、パリサイ人にとっては、「たかが 1000 円とか、100 円のことで、そんな熱心になって忠実になれなんていってどうするのか？」という蔑む思いが出てきたのです。しかも、何百万円単位の負債の免除を譬えとして用いておられたのです。蔑む思いがでてきたことでしょう。私たちも、何か世の中のことを話していると「ああ、世の中のことね」と思わないでしょうか？けれども、実は自分自身がそういったことに囚われているとうことがあるので、積極果敢に取り組まなければ、実は自分自身がその欲から解放されていないということです。

16 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音が宣べ伝えられ、だれもが力づくで、そこに入ろうとしています。17 しかし、律法の一画が落ちるよりも、天地が滅びるほうが易しいのです。18 だれでも妻を離縁して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すことになり、夫から離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すことになります。

イエス様は、パリサイ人に対して律法と預言者、つまり私たちの持つ旧約聖書について教えておられます。律法が与えられ、預言者も語り、それがヨハネにおいて最後になった。そして彼らが証ししていたキリストご自身が現れたので、今は神の国が来た。そこに、「だれもが力づくで、そこに入ろうとしています」と言われていますが、イエス様を信頼して、救われる者たちが起こされているということです。けれども、律法についての言い伝えをパリサイ派は守っている。人の言い伝えにしかすぎなくなってしまうものを守り、神の戒めをなおがしろにしています。そのような障壁、妨げになるようなもの、つまずきをパリサイ派のような教師は置いているにも関わらず、一般のユダヤ人たちはそれでもイエス様によって神の国に入っている、ということです。私たちの周りでも、いろいろ障壁になるようなものがいっぱいあっても、それでももがくようにして、イエス様への信仰に至り、救われたということではないでしょうか？

そしてイエス様は、律法をないがしろにしているのは、実はパリサイ派のほうなのだということを明確にしておられます。律法の一画が落ちるよりも、天地が滅びる方が易いとまで言われます。イエス様が来られたのは、律法や預言者を破棄するためではなく成就するために来られたのですが、彼らのほうが律法に聞き従っていなかったのです。その一例をイエス様はここで語られており、離縁状についてのモーセの律法を盾にして、心の中では姦淫の心を持ちながら、今の妻と離縁して、他の女と結婚していたのです。

## 2B 金銭愛の行く末 19-31

そこで、イエス様は、まるで彼の心を拡大鏡にかけるかのように、金持ちとラザロの話がされます。

## 1C 無慈悲な心 19-22

19 ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。20 その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。21 彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた。

ここに出て来る金持ちの問題は、金を持っていることではありませんでした。先ほどイエス様が語られていた、不正の富で友を作って、その友が永遠の住まいに迎えてくれるということをないがしろにしていたのです。貧しい者が自分の富からのおこぼれでももらいたいと思って、その門前にいたのに、助けることも何もしなかったということです。律法にも、貧しい人々を顧みる戒めがあるのに、それを怠っていました。その富について、神の事、貧しい人の事を思って使っていなかったということです。

そして、ラザロですが、彼はヨハネ 11 章に出てくる、マルタとマリアの兄弟ラザロとは異なる人物でしょうが、それでもこうやって個人の名前が出て来るということは、イエス様のここでの話は譬え話ではなく、誰か実在している人、そして実際のことであると考えられます。そして、カナン人の女の事を思い出してください、犬でも食卓から落ちたパン屑は食べますと答えましたね。そうです、そのようにして犬はパン屑を食べていました。当時、ティッシュペーパーもナプキンもありませんでした。食べたパンの最後の一切れで手を拭きます、それでそれを床に落とすのです。それを犬が食べます。それさえも食べたいとラザロは願ったのですが、食べることができませんでした。その代わり犬が、ラザロのできものを舐めていました。犬は、聖書では悪い意味に使われることが多いです、ここでは本当に悲惨な状況であることを表しています。

イエス様がなぜこの話をされたかを考えますと、この蔑んでいたパリサイ派の心は金好きだというのがありますから、貧しい人を顧みない貪欲が彼の心の中にあっただけでしょう。その心をこの金持ちの中にイエス様はプロジェクターで見せるように、拡大させたのではないかと思います。

22 しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懷に連れて行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。

ここに主は、全ての人々が死ぬということを表しておられます。富んだ者も、貧しい者も、全ての人々が死にます。そこに誰も、何も持っていくことができません。他の宗教では、棺桶の中にあの世と一緒に持って言うてもらおうように色々入れますが、私たちは裸で生まれ、裸で帰ると信じています。

ここで、二人の対照的な人が、対照的な死に方を教えています。貧しい人は死んでいますが、葬むられたとは書いていません。金持ちは葬られています。この貧しい人は葬られていません。普通、貧しくとも家族や親戚が葬りに来ますし、また慈善家がいれば、そういった人のために葬ります。

けれども、そのどちらも行われていなかったのですから、まるで獣の死骸を捨てるかのように捨てられたのではないか？と思われる。しかし、彼には信仰がありました。「御使いたちによってアブラハムの懐に連れて行かれた」とあります。御使いが来ているということは、彼が正しい人であったみなされている証拠です。行いがというよりも、神に信仰を持っていたので、それが義とみなされています。「ヤコ 2:5 私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。」

その信仰の父祖でありアブラハムがここにいます。ここは、ユダヤ人によって要になる人物です。アブラハムこそが、神にその子孫が祝福を受けると言う約束が与えられ、契約の民とされました。その印が割礼でした。今、ラザロがいかに貧しかろうとも、アブラハムの懐に入れられたというのは、限りなく深い慰めです。

### 2C 苦しみの場所 23-31

23 金持ちが、よみで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懐にいるラザロが見えた。24 金持ちは叫んで言った。『父アブラハムよ、私をあわれんでラザロをお送りください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすようにしてください。私はこの炎の中で苦しくてたまりません。』25 するとアブラハムは言った。『子よ、思い出しなさい。おまえは生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている。』

金持ちが、「陰府(よみ)」で苦しんでいます。新改訳 2017 は、今までヘブスとギリシア語をそのまま訳した言葉から、陰府と訳していますね。旧約聖書には、死者の行くところを陰府、ヘブル語でシェオルと呼びます。必ずしも全ての人が苦しむものではありません。ここにいるアブラハムもまた、よみにいると思われる。しかし、よみにおいて、アブラハムの懐にあっては慰めを受け、そうではないところでは炎の中での苦しみがあります。数多く聖書では、罪について、全く水のない姿、渴き切った姿、火で吹き払われる殻、深い闇のようなもので表現されています(Ⅱペテ 2:17 参照)。

覚えていますでしょうか、ユダヤ人にとってアブラハムのそばにいることは、自分たちにとって救いでもありました。神の国において、父祖であるアブラハム、イサク、ヤコブと食卓に着くことをイエス様は教えておられました(ルカ 13:28,29)。私が思い出すのは、2016 年の聖地旅行で安息日の食事に正統派ユダヤ教の方々のお宅に招かれたことです。イエメン系ユダヤ人でとても宗教的なご夫婦です。私たちは 20 名以上いましたし、それはとても素晴らしい食事でした。なぜそこまでもてなせるのですか？と尋ねたら、「アブラハムも旅人を招いた」とだけ答えたのです！そこまでアブラハムをそばに感じて、足跡に従っていきたくと思っています。

ところが、覚えていますでしょうか、バプテスマのヨハネは悔い改めのバプテスマを授けましたね。悔い改めなければ火に投げ込まれることを説きました。「3:8-9 それなら、悔い改めにふさわ



しい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」そして今ここに、イスラエルの子孫である金持ちが、彼の子孫だからと言って救いが保障されているのではなく、神に立ち返り、信じることによるのみその恵みにあずかることができることを教えています。

ところで、ここで金持ちは、「ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすようにしてください。」などと言っています。彼のことを知っていたのですね。そして今、彼を自分のしもべのように使おうとしていますね。彼はまだ、今、立場が逆転してしまったことに気づいていません。貧しい者が信仰において富んだ者となり、金持ちがすべてをはぎ取られてしまったのです。私たちは、ここで警告を受けなければいけませんね。物質的な豊かさ、いろいろな意味での良い境遇が、必ずしも霊的に良いことではないこと。実はその正反対なのだ、ということです。物質的な豊かさの中で満足していたラオディキアの教会に対して、イエス様が言われました。「黙 3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない。」

26 そればかりか、私たちとおまえたちの間には大きな淵がある。ここからおまえたちのところへ渡ろうとしても渡れず、そこから私たちのところへ越えて来ることもできない。』

ここには厳粛な神の真理が書かれています。淵があるので、互いに意思疎通はできるけれども、行き来することはできないということです。ここで私たちが考えなければいけないのは、「死後は、神の慰めの場所と地獄には、行き来することができない。」ということです。天国と地獄で行き来はない、ということです。「ヘブ 9:27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」とあります。死んだ後に、救われる機会はないということです。そうではないとする主張もありますが、それらの箇所はどうとも読めるものであり、そういった定かでない箇所ではなく、明らかに行き来できないと明確に書かれてあるほうを、信じたいと思います。つまり、自分の肉体のあるうちに行っていることが、報いとして永遠に残るとということです。

ちなみに、今、死んだ人はどうなるのか？ということですが、イエス様が死なれ、葬られ、三日目に甦られた時に、陰府にいたアブラハムの懐にいた人々は、天に移されたことがエペソ 4 章に書いてあります。「エペ 4:8-10 そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。」「上った」ということは、彼が低い所、つまり地上に（注：地の低いところに）降られたということではなくて何でしょうか。この降られた方ご自身は、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方でもあります。」主は、贖いを十字架で成し遂げられたので、これまでアブラハムの懐にいて慰められていた人々は、天に連れて行かれ、主と共にいます。今、キリスト者は地上から離れれば、そのまま天におられる主と共にいるこ

とになります(ピリ 1:23)。

27 金持ちは言った。『父よ。それではお願いですから、ラザロを私の家族に送ってください。28 私には兄弟が五人いますが、彼らまでこんな苦しい場所に来ることがないように、彼らに警告してください。』

ラザロは、再びラザロに頼ろうとしています。ここからも分かることは、ラザロは彼の家族にもよく知られていた人々ということができます。つまり、彼らは知りながらラザロに施しをすることはなかったということです。

29 しかし、アブラハムは言った。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。』  
30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。』31 アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

ここに、イエス様が、金好きなパリサイ人に語りたかったことがあります。彼こそが、モーセと預言者を聞いていなかったということです。貧しい人を顧みることがないのであれば、神ご自身がご自分の怒りを富んでいる者に対して下されるということです。律法には数多く、その教えがあります。新約聖書にもヤコブが、富んでいる者に対して神の怒りがあることを教えています(5:1-5)。

そして大事なものは、ラザロが生き返っても、彼らは聞き入れないという言葉です。主は、人の心を知っておられました。人がよみがえるという奇跡を見ても、律法と預言者、つまり主の言葉に従うつもりがなければ、悔い改めることはないのです。同じ名前のラザロが、ヨハネ 11 章でよみがえりましたね。それでも何人かは信じないで、ユダヤ人指導者に告げ口しました。

とても厳粛なイエス様の言葉でした。富と言うことに対して、確かにしっかりと友を作る、つまり御国のために用いていくということをすることによって、初めて金銭欲から自分を守ることになるのだということです。自分が今、生かされている時は限られています。そこで今、自分に与えられているもの、その機会を十分に活用し、賢く生きることが必要です。主は、世から離れて自己満足に浸りなさいと言われませんでした。世に対して証しを立てなさいということです。そして、与えられているものを福音のゆえに捧げていき、それが後の世に報いとなって返ってきます。